



NEWSLETTER

立教大学教会音楽研究所ニューズレター 2025年/No. 33

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 Tel/Fax: 03-3985-2786 <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/icm/>

所長ごあいさつ

2025年度の報告と、2026年度に向けて

立教大学教会音楽研究所・所長
立教大学異文化コミュニケーション学部教授
星野宏美



前号のニュースレターにも記したとおり、立教大学教会音楽研究所ではこの数年間、世代交代が進んでいます。今年度は、遠藤陽平先生、原田靖子先生を所員にお迎えしました。2024年度に加わってくださった佐藤望先生、森裕子先生とあわせて、4名の新所員に今号のニュースレターにご寄稿いただき、充実した紙面とすることができました。

2025年度は、スケジュールの都合上、催しが秋冬に偏りましたが、例年にましてさまざまな活動を行いました。定例のオルガン講座に加え、多様な内容の講演会、レクチャーコンサート、さらには、久しぶりに学内でのワークショップを開催できたのは大きな喜びです。所員の尽力もさることながら、教会音楽研究所の活動に日頃より関心を寄せ、支えてくださっている皆様のおかげと感謝申し上げます。

縁の下の力持ちとしての事務の働きも看過できません。今年度はとくに、十数年に一度という大型改修工事が研究所の部屋に入りました。天井埋め込みの空調の入れ替えなどもあり、部屋の荷物を隅に寄せたり、外に運び出したりせねばならず、ちょっとした騒ぎでした。猛暑の中、力仕事を一手に引き受けてくださった前事務の石井祐三子さんには感謝しかありません。ご都合により石井さんが退任された後、所員の佐藤雅枝さんが秋学期の間、

事務仕事にも奔走してくださいました。

さて今回、いわば外から強制的に促されたわけですが、以前からの懸案であった荷物整理に向き合えたのは有意義でした。出版物のバックナンバーのほか、25年間の活動記録（フロッピーディスク以下、歴代のツールによるデータ、催しのアナログおよびデジタル録音など）や、折に触れて収集してきた教会音楽関係の楽譜や書籍が蓄積しており、その全体を把握するのはなかなか大変でした。これらの資料を今後いかに保管し、また活用するか、考えていきたいと思っています。

教会音楽研究所の部屋は現在、12号館2階にあります。同じ階には総合研究センター傘下の他の研究所が並んでいます。私たちが荷物整理に追われていた頃、いくつかの研究所は、部屋の引越しを余儀なくされました。2026年度開設の新学部（環境学部）の事務スペースとして明け渡す必要が出てきたからです。教会音楽研究所が設立された1998年には学部数7（池袋5、新座2）だった立教大学ですが、2026年には学部数12（池袋8、新座4）となります。1998年の学生数1万3千人強から2025年の2万1千人超えという数の倍増も驚きですが、四半世紀前には考えも付かなかった新しい学問の誕生に目を見張ります。

総研センター傘下の12の研究所のうち、教会音楽研究所はちょうど真ん中の6番目の設立ですが、1947年設立の教会音楽学校を前身と考えると、アメリカ研究所（1937年設立）に次ぐ古参です。キリスト教とリベラルアーツの精神を土台とする立教大学の伝統を体現する存在であり続けたいと願っています。

目次

定例コラム 1 聖歌隊長便り.....	2
定例コラム 2 チャプレン便り.....	5
定例コラム 3 オルガン便り①.....	6
定例コラム 4 オルガン便り②.....	9
所員紹介	10
研究所活動報告	14

Scott Shaw



キヨンの日曜日 —チリの教会音楽との出会い—

立教大学諸聖徒礼拝堂聖歌隊長
スコット・ショウ

私は2025年の夏に、チリのキヨン (Quillón) という町で2週間を過ごす機会を得ました。友人の家族のもとに滞在し、毎日のようにパンや生活必需品を買いに町へ出かけたり、近隣の町を訪ねたり、ハイキングをしたり、そしてもちろん、おいしい料理やワインを味わったりしました。キヨンでの滞在中、特に印象に残っている体験の一つが、地元のカトリック教会での日曜日のミサに参列したことです。

キヨンはチリ南部に位置する人口約1万人の町で、ローマ・カトリック教会、モルモン教会、福音派教会の三つの教会があります。歴史的に見ると、「無原罪の御宿り教会 (Iglesia de la Inmaculada Concepción)」が町の中心的な教会とされ、重要な行事や祭りはここで行われてきました。チリのほとんどすべての町や都市と同様に、この教会も町の中央広場に面して建っています。現在の建物は、2010年の大地震で以前の教会堂が倒壊した後に再建されたものです。簡素で現代的な建物で、東側にいくつかの聖像、西側に控えめなステンドグラスがある以外、特に目立った装飾はありませんでした。私はこの教会にオルガンがあるとは思っておらず、最初の訪問時にもそのような兆候は見つかりませんでした。そこで、ミサではどのような音楽が用いられているのだろうかかと興味を持ち、8月3日にホストファミリーとともにミサに出席することにしました。

その日の音楽について述べる前に、

旅先での教会音楽家の「期待」について少し触れておきたいと思います。すべての教会音楽家を代表して言えるわけではありませんが、多くの人が似たような行動を取るのではないかと思います。町や都市を訪れた際、私がまず探するのは教会や大聖堂です。建築、歴史、そして可能であれば、その建物でどのような音楽が演奏されているのかを必ず確認します。たとえばイギリスを旅した際には、どの教会や大聖堂に入っても、日曜日にどのような音楽が演奏されているかを示す手がかり——聖歌集、パイプオルガン、聖歌隊席など——を見つけることができました。しかしキヨンでは、そのようなものを一切見つけることができず、イギリスで見られるような形式張った音楽ではないだろうと推測しました。

さて、キヨンの日曜日に話を戻しましょう。私たちはミサ開始の数分前に教会に到着しましたが、すでに会衆でいっぱいでした。オルガン音楽の代わりに耳に飛び込んできたのは、ギターと歌手による明るく喜びに満ちた音楽でした。会衆の中には一緒に歌う人もいれば、家族や友人に挨拶を交わす人もいましたが、聖歌集や印刷物を持っている人は誰もいませんでした。数か月経った今でも、オルガン前奏の代わりに演奏されていた、その揺れるように美しい音楽をはっきりと思い出すことができます。ミサはもちろんスペイン語で行われましたが、聖公会やカトリックのミサに親しんでいる人であれば、言語が違ってても基本的な構成やテキストが同じであるため、各部分はす

ぐに分かるものでした。音楽の様式は多様でしたが、いずれも力強いギター伴奏による声楽で、男女の声の平行6度で歌われる場面が多く見られました。ミサの各部分の移行では、主に一人のギタリストが会衆を巧みに導き、時には司式者の言葉に重なるように演奏されることもありました。私は携帯電話でミサの音楽部分の多くを録音しましたが、何か月も後にそれを聴き返しても、なお心を打たれます。この南米の地方教会で、私は美しく、熱意にあふれ、そしてチリの文化的ルーツに正直な音楽に出会いました。

ホストファミリーのつてを頼りに、その日の音楽を指導していた人物を知り、インタビューを行うことができました。彼の名前はイバン・モンテロ (Iván Montero) で、1979年以来この教会の音楽監督を務めています。モンテロ氏はこの地域ではよく知られたギタリスト兼歌手で、世俗音楽と宗教音楽の両方を演奏しています。彼は私のために時間を割いてくださり、キヨンの教会音楽について詳しく学ぶ機会を与えてくれました。以下はそのインタビューの一部です。記事の分量を適切に保つため、会話はかなり省略していますが、モンテロ氏とその音楽グループのメンバーが、教会での役割をどれほど真剣に受け止めているかを、読者に感じ取ってもらえれば幸いです。また、この文章を読む教会音楽家の方々が、自分たちの地域固有の音楽的伝統を聖なる音楽に取り入れる勇気を得てくれることを願っています。

Interview

インタビュー

イバン・モンテロ氏に行ったインタビューを以下に掲載します。
*記事内敬称略



——日本で私たちが用いている礼拝音楽は、8月3日に聴いたものとはかなり違います。私には、あの音楽がとても「チリらしく」聞こえました。
モンテロ：はい。私はいくつかの聖歌隊と仕事をしていますが、自分の聖歌隊で作る音楽には、私自身のアイデンティティを少し加えています。それはチリの民俗音楽的な性格と言えるでしょう。もちろん100%民俗的というわけではありませんが、アプローチや様式には、チリ民俗音楽の印がはっきりとあります。

一方で、私が関わっている他のグループはそうではありません。より旋律的で、合唱的で、いわば“音楽的”で、より普遍的なスタイルです。言語は同じでもですね。しかし、私がしていること、正確には私と妻がしていることは、主にこうした音楽です。どこかチリ的で、都市的なフォルクローレといった感じでしょうか。私たちには非常にはっきりとした音楽的アイデンティティがあります。

——教会の音楽全体を担当していらっしゃるのですか。

モンテロ：基本的にはそうです。グループの責任者としては妻がいて、事務的な面を担当しています。私は音楽面を指導し、声部の指導や曲の練習、各人が歌う音域や調性を決めています。

歌う曲を選ぶ際には、すでに持っている非常に幅広いレパートリーの中から、グループ全体で相談して決めます。私は1979年からこの仕事をしています。教会では、妻と私は夫婦として、合計6つあるすべての合唱団を担当しています。各ミサの音楽は、典礼暦に応じて選ばれます。

——おそらく聖職者の方々よりも長くここにいらっしゃると思いますが、音楽選択について神父と相談することはありますか。

モンテロ：神父が交代するときには、こちらから協力する姿勢を示します。神父ごとに仕事の進め方やスタイルは異なりますが、それによって使う歌の種類が変わることはありません。典礼暦や聖書朗読のテキストは変わらないからです。つまり、誰が神父であっても、構造は常に同じなのです。

——一言、あるいは短い言葉で、教会で演奏している音楽のスタイルを説明するとしたら、何と言いますか。チリ固有の音楽でしょうか。

モンテロ：私はこれを『ムシカ・クリスティアーナ・クリオージャ (Música cristiana criolla)』、つまり伝統的フォルクローレに基づくキリスト教音楽と呼んでいます。クリオージョとは、チリ人としての固有のアイデンティティ、特定の地域や共同体に根ざしていることを意味します。

私たちの宗教音楽には大きく二つの流れがあります。一つは、より旋律的で内省的なもの。もう一つは、より直接的に民俗的なもので、チリのトナーダ、国民舞踊であるクエカ、そして農村部に特徴的なワルツ、グアラージャ、コリードなどのリズムを用います。これはまさに、100%フォルクローレのスタイルです。

——私が出席したミサでは、誰も歌集や冊子を持っていませんでした。人々は曲を暗譜しているのですか、それとも聖歌隊を聴くだけなのでしょう。

モンテロ：私たちが歌う曲の多くは、すでに人々の潜在意識の中にあります。すべての歌詞や節を覚えているわけではなくても、旋律や歌自体には親しんでいるのです。たとえば『漁師のように (Pescador de hombres)』を歌えば、多くの人々が知っています。ミサで使う音楽の約80%は、会衆にとって馴染みのあるものだと思います。

時にはスクリーンに歌詞を映すこともあります。現在はもっと恒久的なものとして、歌集の制作を進めています。すでに草案はほぼ完成しており、12月の教会創立記念日までに、500～600部を印刷して会衆に配布する予定です。

——それらの歌は購入したものでしょうか、それともご自身で作曲されたのですか。

モンテロ：実際には、すべて世代から世代へと受け継がれてきたものです。私より年上で、すでに合唱団にいた人たちが私を招き入れ、引退していく過程でその歌を教えてくださいました。私は彼らから学びました。

また、長年活動してきた中で、教区レベル、つまり地域全体や他の町との交流も行っています。別の場所に行って新しい歌を学び、互いにレパー



トリーを共有します。私たちが使っている音楽は、商業的に購入されたものではありません。常に誰かが教えてくれるのです。

そしてレパートリーの中には数は多くありませんが、私自身が作曲した作品も含まれています。

この後のインタビューでは、ミサで歌われた各曲について、演奏された順に質問しました。以下は、その回答を読みやすくするために要約したものです。

【入祭唱 キリエ】 神父の言葉に対して会衆が応答する形式。

モンテロ：これは「トローテ」と呼ばれるリズムを用いた伝統的なチリ音楽です。

【グロリア】

モンテロ：カトリック世界全体で歌われている普遍的な聖歌です。

【福音前のアレルヤ】 グレゴリオ聖歌の旋律に、穏やかなチリ風ギター伴奏。

【福音後の歌】

モンテロ：年長の聖歌隊員から教わった歌で、世界中のカトリック教会で広く歌われています（題名は『主を信頼します』）。朗読された福音の言葉を黙想するためのものです。

【奉納唱】

モンテロ：伝統音楽的ですが、チリ風にされたものです。他の教会ではキーボード伴奏のこともありますが、キヨンではギターです。

【サンクトゥス】

モンテロ：チリ特有ではなく、普遍的なカトリック聖歌ですが、キヨンではギターによってチリ化されています。

【感謝の祈りの終結部】 神父が朗唱。

モンテロ：昔、少なくともチリでは、これはラテン語で歌われていました。神父たちは歌われるミサを行い、典礼言語はラテン語でした。その伝統に由来するものです。現在はスペイン語に翻訳され、一種の聖歌復興とも言えます。

【大アーメン】 感謝の祈りの最後に歌われ、アフロ・アメリカン・スピリチュアルの旋律を用います。

【主の祈り】 1960年代のアメリカの歌曲「サウンド・オブ・サイレンス」の旋律。

モンテロ：この旋律はチリ全土で使われています。

【アヌス・デイ】 会衆が歌うリフレインと、神父の朗唱が交互に行われます。神父の言葉の合間に、即興的なギターのフレーズが挿入されます。

モンテロ：ああいう小さな音楽的工夫をするのが私は本当に好きなんです。私はギターを愛しています。いつも手の届くところにあり、常に持ち歩いています。ほんの小さな編曲、細部にすぎません。好きな人もいれば、そうでない人もいます。「典礼の規範から外れている」と言う人もいます。でも、ほとんどの人は本当に喜んでいて、大多数が喜んでいて分かっているならば、少数意見はあまり気にしません。

印刷物にアクセスできず、またミサに一度しか参加できなかったため、本稿は、日本のキリスト教会で一般的に見られるものとは異なる、教会音楽のあり方への導入にすぎません。しかし、この文章が、読者に新しい試みへの自信と、宗教音楽について新たに考える開かれた姿勢をもたらすことを願っています。



歌による祈りを考えるとき —テゼの祈りを体験して思うこと—

立教大学チャプレン
藤田 誠



Makoto Fujita

2025年4月に立教大学チャプレンに着任して以来、約1年の月日が経過しました。この間、平日は立教大学で日々の礼拝をお届けし、折々にお届けされるチャペル団体や体育会による特別礼拝に関わると、そこには音楽関係のチャペル団体（聖歌隊、オーガニスト・ギルド、ハンドベルクワイア）がしっかりと礼拝に参加して会衆の祈りと共に音楽をお届けしている姿があります。

また、主日は立教学院諸聖徒礼拝堂の会衆のみなさんの祈りと共にやはり先に触れたチャペル団体の音楽が共にあります。礼拝の基本は神さまへの感謝ですが、礼拝で届けられる音楽は神さまへの感謝を表す祈りと言えます。

聖公会で言う「聖歌」、カトリックで言う「典礼聖歌」、プロテスタント教会で言う「讚美歌」は聖書のみ言葉を土台にした歌が多いです。この聖書とは、旧約聖書から新約聖書に至るまで神とキリストと霊と人々が出会い、救われた思いを証言している書物ですが、特に人々とキリストとの出会いに至っては、この世で生きづらさ覚え、この世の生に絶望しか見出せなかった人々が希望へと変わる物語が多々あります。そのクライマックスはキリストの十字架での死と三日目の復活です。それゆえに礼拝でお届けする聖歌は、ある意味この世で希望を失っていた人々が、神さまがそれぞれに与えた「時」を通して希望へと変えられた感謝と賛美の

表れと言えましょう。

しかし、私たちは日常生活の中で常に希望を持って生きているとは言えません。会社、学校、家庭、また教会においても人との交わりやそれに応じた出来事によって簡単に元気を無くしてしまいます。そんなとき、教会で聖歌を歌おうとしても、実は歌えないときがあります。このようなとき、私がしばしば思い起こすのはテゼの祈りです。

テゼは1940年にブラザー・ロジェによってフランスのテゼ村で始められた男子の観想修道会です。カトリックとプロテスタントを出身とするブラザーたちが30ほどの国々から集まり、フランスのテゼ、また世界の貧しい地域で生活しています。1950年代後半より、多くの青年たちがテゼを訪問するようになりました。青年たちは、年間を通じて毎週テゼで開かれる集いに参加します。さらにテゼは、それぞれの家や学校や職場に戻って道を模索し続ける青年たちを支えるために、「地上における信頼の巡礼」（2025年度はフランスのパリ）を各地で開催しています。テゼでは、一日に3回、ブラザーたちとテゼを訪れているすべての人が共同の祈りに集まります。歌と聖書の朗読と沈黙。テゼの歌は、現在世界各地に広まり、多くの言語で歌われています。このような多言語で歌を歌うようになったのは、ブラザー・ロジェが考え抜いた結果ゆえでした。

実は、青年が世界各地よりテゼに

集まるようになった当初、多言語が飛び交う中で、ブラザー・ロジェは、どのように祈りを共有できるのか悩みました。そこで彼が思い付いたのが短いフレーズの歌を繰り返し歌うという手法でした。多くの歌は聖書より引用された短くみ言葉にシンプルなメロディーをつけたものです。そして、歌う回数を決めずに何度も繰り返し歌うことによってみ言葉を頭ではなく身体で感じ取ることができます。

テゼの祈りで歌が歌えないとき、何回も繰り返されるみ言葉の歌に身を委ねると癒されたという体験をした人が多くいます。礼拝での歌もそういう場面があってよいと思います。このような体験は礼拝で恍惚状態に入り、現実の世界へ派遣された時、さらに自分の足で立てなくなってしまう要素も注意点としてはありますが、私はここで3世紀にアレクサンドリアにいた教父、オリゲネスの言葉を信じたいと思います。このような言葉です。

「あなたが神にどう感謝してよいか知らなくても、あなたの内にいつも聞こえる心からの賛美の歌声を喜んでください。」

オリゲネスは、霊において神への賛美を歌うとき、それを言葉を越える喜びが神から人へ与えられることを説きますが、それは「確かに」（アーメン）と思われる人は多いのではないのでしょうか。

Yuko Sakiyama



英国教会音楽の底力

当研究所所員
立教学院オルガニスト
崎山裕子

2025年2月27日から3月10日にかけて、「こんなに良い天気が続くことは本当に珍しい」と口を揃えて言われた立教大学オーガニスト・ギルド第7回英国研修が実施された。

最初の訪問地であるリッチフィールド大聖堂の人々は、中学生くらいにしか見えない立教ギルド生たちを大いに歓迎してくれた。そのオルガンは、1908年に建造された後、1974年にいくつかのパイプが再整音され、2000年にパイプを大幅に増やして拡張されたハリソン&ハリソン社製82ストップの巨大な楽器で（末尾のスペック参照）、パイプが向きを変えて2階回廊のあちらこちらに立っているので、巨大空間の地上にいる人々には演奏台で聴こえているのとはまったく違う音が届いている。このような楽器で英国口マン派の楽曲を弾くときには、オーケストラのサウンドを意識し、楽譜には書いていない異なるストップでレジストレーションを選択する自由が演奏者に託されていることを、オルガニストから教えられた。鍵盤は浅く妙につかえて、レガートで弾くのが困難なので、ギルド生たちは初めてのタッチに苦心しつつ初日午後後のミニコンサートを何とか切り抜けた。大聖堂の男声クワイアによる夕の祈りに参加し、音に包まれた豊かな一日が終了した。

翌日、電車でバーミンガムへ。まっすぐ歩けないほどの人ごみをかき分け、3つの教会へ向かった。セント・

チャド・カトリック大聖堂でJ. W.ウォルカー & サンズのオルガンを、専属オルガニストの豊富な音楽体験を聞きながら弾かせていただき、町の中心に聳えるセント・マーティンではハリソン&ハリソンオルガンで短い練習の後に無料コンサートを開催し、教会を見学しに来た観光客がギルド生たちの演奏を楽しんだ。最後は聖公会のバーミンガム大聖堂で会堂見学を終え、帰途。

翌日3月2日はリッチフィールドで逝去した聖チャド記念日であり、その記念礼拝は壮麗、音楽も祝祭的で、最後は退堂聖歌“WESTMINSTER ABBY”を練り歩きながら歌った。同日の夕の祈りでは、小学生から高校生で構成された女声聖歌隊の透明で清らかな奉唱に包まれた。

オックスフォード訪問では、キーブル・カレッジのティックルオルガンを思う存分、弾かせていただいた。3秒以上あると思われる残響に浮遊するオルガンの音色は現実のものとは思えないほどだったが、2年前にイタリア人のオルガンビルダーがリード管を再整音したそうで、ティックルの音色にブレンドしていなかったことだけが悔やまれる。ブラックウェルズ書店へ楽譜を買いに立ち寄り、オックスフォード教区大聖堂でハリーポッターの撮影場所ともなったクライスト・チャーチへと向かった。プラント司祭の友人である女声聖歌隊隊長に案内されて、聖歌隊練習室、残響の

素晴らしいホールなど、部外者は侵入できない場所を見せていただいた。

残念だったのは、クライスト・チャーチのオルガンがドイツ製だったこと、参加した夕の祈りの聖歌隊とオルガニストが訓練されていない大学生だったことだ。

リッチフィールドから電車でケンブリッジへ移動。ウエストミンスター・カレッジの宿舎は落ち着いた雰囲気、特別にチャペルの小さなオルガンをギルド生の練習にと開放してくれた。午後は早速、セルウィン・カレッジへ向かい、「灰の水曜日」の前日にパンケーキを食すという伝統に基づいたお茶会に参加した。日本人留学生二人が私たちを見つけ、懐かしそうに話しかけてきてくれた。翌日はキングス・カレッジ、それからセルウィン・カレッジの「灰の水曜日」の礼拝をはしごして額に2度、灰を付けてもらった。なんと今年のキングス・カレッジはアレグリの“Miserere mei”を歌わなかったが、幸い、セルウィンのチャペルでは美しい古の音に浴することができた。

最終目的地ロンドンの宿舎はウィンフリッド・ハウスという、ドイツのキリスト教団体が経営するホステルだった。到着早々、セント・ジャイルズ・クリッペルゲイトにおける、3回目となるA. M. トーマス氏のレッスンを受けた。的確かつ効率的な指摘でギルド生の音が瞬時に変わる。「オルガンは弾く場所、建物によって音や表現、

タッチ、テンポを変える」ということを学んだ。そこから歩いてセント・ポール大聖堂へ向かい、予約した聖歌隊練習を地下で見学し、クワイア席隣りの特等席で夕の祈りに参加した。男声クワイアによるアカペラのルネッサンス音楽を聴くと、人生の宝物をいただいたように感じる。

ロンドン市内オルガンツアーの最初はクライスト・チャーチ・スピタルフィールドへ。R.ブリッジオルガンはなんとミートーン、カプラー機能の無い18世紀の楽器だった。そこから歩いてグロスベノール・チャペルへ行き、古典的な楽器だが意外にロマン派も弾けるW.ドレイクオルガンを見学。最後にウエストミンスター寺院の夕の祈りに参加した後、普段は絶対に見ることができない英国の

歴史へと踏み込んだ寺院ツアーを、特別にいただいた。

研修最終日、A.トーマス先生主催の世界婦人デー企画、ロンドンブリッジ駅構内に置かれた移動式オルガンでのコンサートにギルド生が飛び入り参加。10時半から25分間、ソロ曲の他にスタジオ・ジブリ連弾曲を演奏した途端、親子連れが立ち止まって聴き入っていた。

最終日9日朝の主日礼拝はハイ・チャーチとして有名な諸聖徒マーガレット・ストリート教会へ。グレゴリアン・チャントで始まり、入退堂や所作、お香も15世紀当時のまま。立教アコライトたちが涎を垂らして魅入るだろうと思う礼拝後、ハリソン&ハリソンオルガンを見せていただき研修は無事に終了した。

10日間で弾かせていただいたオルガンは12台、参加した夕の祈り6回、灰の水曜日礼拝2回、主日礼拝2回。英国の教会オルガニストたちはプロもアマチュアも、それぞれが心から音楽を楽しみ、プライドをもって礼拝を支えていた。聖歌隊の奉唱は人々の生活の一部となって、毎晩行われる夕の祈りの出席を日課としている。大聖堂附属小学校で養われた教会音楽教育は、オックスフォードやケンブリッジ大学のコリスターやオルガンスカラーとなることで受け継がれてゆく。カレッジを卒業し、住む町の教会の聖歌隊メンバーとなって歌い続けている。その様に英国教会音楽の底力を見た。

Lichfield Cathedral のオルガンについて (Harrison and Harrison)

<https://www.lichfield-cathedral.org/worship-music/the-organ>



Pedal Organ

1. Double Open Diapason (from 2) 32
2. Open Diapason (wood) 16
3. Open Diapason 16
4. Violone 16
5. Bourdon (8 from 28) 16
6. Echo Bourdon (from 45) 16
7. Principal 8
8. Bass Flute 8
9. Fifteenth 4
10. Mixture IV
11. Contra Posaune 32
12. Trombone 16

13. Trumpet 8
 - I Solo to Pedal
 - II Swell to Pedal
 - III Great to Pedal
 - IV Choir to Pedal

Choir Organ

14. Open Diapason 8
15. Lieblich Gedackt* 8
16. Viole Sourdine 8
17. Dulciana 8
18. Principal 4
19. Wald Flöte 4
20. Nazard† 2 2/3
21. Fifteenth† 2
22. Flageolet† 2
23. Tierce† 1 3/5
24. Larigot† 1 1/3
25. Mixture** III
26. Corno di Bassetto* 8
 - V Tremulant VI Solo to Choir
 - VII Swell to Choir

Great Organ

27. Double Open Diapason 16
28. Bourdon 16
29. Large Open Diapason 8
30. Medium Open Diapason 8
31. Small Open Diapason 8
32. Bell Gamba 8
33. Hohl Flöte 8
34. Stopped Diapason 8
35. Principal 4
36. Octave Gamba* 4
37. Harmonic Flute* 4
38. Twelfth 2½
39. Fifteenth 2
40. Full Mixture IV
41. Sharp Mixture II
42. Double Trumpet 16
43. Posaune 8
44. Clarion 4
 - VIII Great Reeds on Solo
 - IX Great Reeds on Pedal
 - X Swell to Great
 - XI Choir to Great
 - XII Solo to Great

Swell Organ

- 45. Bourdon 16
- 46. Open Diapason 8
- 47. Stopped Diapason 8
- 48. Viole de Gambe* 8
- 49. Voix Célestes* (tenor c) 8
- 50. Principal 4
- 51. Celestina Flute 4
- 52. Fifteenth 2
- 53. Sesquialtera III
- 54. Mixture II
- 55. Contra Fagotto 16
- 56. Trumpet 8
- 57. Cornopean 8
- 58. Oboe 8
- 59. Clarion 4
- XIII Tremulant*
- XIV Swell Reeds on Pedal*
- XV Octave XVI Sub Octave*
- XVII Unison Off XVIII Solo to Swell*

Solo Organ

- 60. Harmonic Flute 8
- 61. Viole d'Orchestre 8
- 62. Violes Célestes** (B flat) 8
- 63. Concert Flute 4
- 64. Cor Anglais (B flat) 16
- 65. Orchestral Oboe 8
- 66. Orchestral Clarinet 8
- 67. Vox Humana 8
- 68. Orchestral Trumpet** 8
- 69. Tuba Mirabilis 8
- XIX Tremulant XX Octave*
- XXI Sub Octave XXII Unison Off*

Nave Organ Manual

- 70. Bourdon** 16
- 71. Open Diapason** 8
- 72. Stopped Diapason** 8
- 73. Principal** 4
- 74. Open Flute** 4
- 75. Fifteenth** 2
- 76. Mixture** V-VI
- 77. Trombone** 16
- 78. Trumpet** 8
- 79. Clarion** 4
- XXIII Nave on Great XXIV Nave on Choir*
- XXV Nave Reeds on Sol*

Pedal

- 80. Open Diapason** 16
- 81. Bourdon** (from 70) 16
- 82. Trombone** (from 77) 16

Accessories

Eight foot pistons to the Pedal Organ

Eight pistons each to the Choir, Great, Swell and Solo Organs

Six pistons to the Nave Organ

Twelve general pistons (duplicated by foot pistons)

General cancel piston

Additions to the 1908 scheme:

** 2000, †1974 (revoiced)

All other stops are original to the 1908 scheme,

those marked * being reinstated with new pipework in 2000

Manual compass 58 notes

Pedal compass 30 notes

The pitch is C = 540 vibrations

Reversible pistons: I - IV, VI, VII, X-XII, XVIII, XXIII, XXIV

Reversible foot pistons: III, X; 1, 11

Combination couplers: Great & Pedal Combinations

Swell on General foot pistons

The pistons to be adjustable, with 32 general and 8 divisional memorie

ごあいさつ

—自己紹介、前職のことなど—

立教学院オルガニスト
原田 靖子



Yasuko Harada

2025年4月より非常勤の学院オルガニストを務めております、原田靖子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

立教では十数年前にも3年半ほどアシスタントオルガニストとしてお世話になり、今回再びの繋がりをいただいて戻って参りましたが、一方で、オルガンは2台とも以前のものとは変わっていましたので、大変新鮮な気持ちでのスタートとなりました。特に、年度の始めに聖歌隊が池袋チャペルでオルガン伴奏で奉唱するのを聴いた時、立教のチャペルで日々生まれる賛美を支えるに相応しい様式を持つオルガンの、その力量を、驚きとともに実感しました。新座チャペルについては、オルガンが新しくなっただけでなく設置位置そのものが変更され、奏楽者としてはまるで初めての場所に来たかのような感覚でした。そのようなスタートとなりましたが、両チャペルの両オルガンそのものから学び、魅力を引き出せるよう、また、これまで培われてきた立教の豊かな礼拝音楽を味わい学びつつ、オルガン奏楽でその一端を担わせていただけるよう、努めてまいりたいと思います。

昨年3月まで、私は11年間長野県に生活の拠点を置いており、このうち9年間は県内のコンサートホールの専属オルガニストを務めておりました。東京にいた時は礼拝奏楽奉仕は毎週のことでしたが、長野では日曜が仕事日のことも少なくなかったため、礼拝奏楽からは思い切って離れ、知り合いの隠退牧師が協力牧師をされていた、小さなリードオルガンのある小さな小さな教会の礼拝に時々参加して

いました。突然奏楽奉仕をしなくなったので当初は少し寂しさも感じましたが、この小さな群れでの礼拝、牧師や信徒の仲間との親密な交流、会衆席で祈り歌うことを通して、結果的に大きな気づきを与えていただいた11年間となりました。

勤務先だったホールは約700席で、ベッケラート社による43ストップを備えたネオ・バロック様式のオルガンが設置され、1987年の設置当初よりオルガニストが置かれてオルガン音楽の普及がなされており、継続的に開催されるオルガン講座には参加者が絶えず、オルガンは受講生だけでなく、修生生によって作られた愛好家の会の方々によっても日常的に大変よく弾かれていました。小ホールには練習用に小型のオルガンも備えられており、こちらも多く利用がありました。私の在職中にはポジティブオルガンが導入されてアウトリーチが始まり、オルガンはさらに身近で心豊かな地域の宝として親しまれるようになり、これらのオルガンをういた公演の企画・演奏、講座、地域の音楽団体との共演や日々のオルガン管理も含め、地方の公立ホールの専属オルガニストの一つ一つの仕事内容は常に、地域に暮らす多様な方々との出会いの中から形作られるものとしてありました。

長野でのホール勤めの間にも、かつて立教で出会いをいただいた先生方にお力添えいただいた2つの主催公演がありました。1つは2016年、スコット・ショウ先生にご依頼して立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊のたくさんのメンバーを率いて松本においていただき、オルガンとのコンサートを開

催した時で、来場者からの反響が大きく、地域の教育者の方々からも再登場を期待する声が強くあり、ぜひ実現できるようにと計画を進めていました。これはその後のパンデミックの影響で残念ながら実現は叶わなかったものの、しかしこのコンサートは唯一無二の鮮烈な感動をもたらした、忘れ難いコンサートとなりました。

もう1つは、ホールのベッケラートオルガンの設置30周年を祝うコンサートのために、坂本日菜先生に新作を委嘱させていただいた時です。ホールは長野県の中信地方に位置し、この地方は大人の合唱団も児童合唱団も活動が盛んだったため、ぜひ地元の合唱愛好家の方々と共に演奏させていただける曲をと考え、合唱とオルガンのための新作をご依頼しました。坂本先生は、八木重吉の複数の詩とラテン語による詩編の言葉でテキストを構成され、混声合唱、児童合唱、カウンターテナーとオルガンによる素晴らしい大作を誕生させてくださり、2018年春に初演が実現。作品の持つ大きな力に皆が終始支え導かれた、深く心に残るプロジェクトとなりました。

この度立教へ戻り、パンデミックの爪痕が大きくあった中でも学生の日常生活が取り戻されており、安堵し、同時に再構築の努力はまだまだ続けられていることも目の当たりにし、関係者の皆様のご尽力に感謝する日々です。多くの方の祈りのうちに守られてきた大切なものは何か、と考えつつ、喜びをもって務めに向き合いたいとあらためて思います。皆様からのご指導を心よりお願い申し上げます。

宗教音楽・オルガン音楽・リベラル・アーツ —国際基督教大学宗教音楽センターでの活動について—

国際基督教大学教授 前・宗教音楽センター長

佐藤 望
Nozomi Sato



©KAMEYAMA, Shino

国際基督教大学（ICU）で音楽を教えております佐藤望です。ICUの宗教音楽センターの活動に関わるものとして、星野宏美先生にお声がけいただき、立教大学教会音楽研究所の所員として末席に名を連ねております。今後、いろいろな交流や協力ができれば嬉しく存じます。本稿では私のICUでの活動についてご紹介いたします。

ICUへの着任と宗教音楽センターとの出会い

私は2019年4月にICUに音楽の教授として着任いたしました。それまでは慶應義塾大学の教養教育で長年音楽教育に携わってききましたが、ICUの持つ「国際性」「キリスト教」「リベラル・アーツ」という3つの柱、そしてそれらが融合した稀有な音楽環境に身を置き、新たな一歩を踏み出すことを決意しました。

ICUの音楽活動の拠点となるのが「宗教音楽センター（Sacred Music Center = SMC）」です。この組織は、1970年にオーストリア・リーガー社製の壮麗なパイプオルガンが大学礼拝堂に奉献されたことをきっかけに、1977年に設立されました。私は2021年から2025年3月まで所長を務めました。

コロナ禍を越えて：メサイア・プロジェクトの復活

着任直後の2020年、世界は未曾有のパンデミックに見舞われました。当時、私は学生たちとヘンデルの《メサイア》全曲演奏を企画し、練習を始めていた矢先のことでした。度重なる緊急事態宣言により、練習の中断と最終的な中止を余儀なくされた時の苦渋の決断は、今でも忘れられません。

しかし、学生たちの情熱は消えませんでした。コロナ禍を学生として過ごしたCMS（学生オーケストラ）とグリークラブのリーダーたちが私の研究室を訪れ、「卒業までどうしてもメサイアを実現させたい」と訴えてきたのです。彼女たちの熱意に応えるべく、2024年に初めて



2025年3月19日メサイア公演会場にて聴衆も参加しての「ハレルヤ」大合唱の様子

クラウドファンディングを実施したところ、目標を大きく上回る支援が集まりました。

2025年3月19日、大学礼拝堂で学生の合唱・オーケストラに最高のプロ奏者24名が加わり、2台のオルガンを駆使した《メサイア》全曲演奏がついに実現しました。ヘンデルが善き目的のためにこの曲を演奏し続けた歴史に倣い、困難を乗り越えて人々の絆をつなぐ喜びを、次世代に引き継ぐことができたと感じています。この公演はインターネットでも公開され、どなたでもご覧いただけます。集った方々がアンコールで喜びに満ちて「ハレルヤ」を共に大合唱する様子が、とても印象的です。

伝統の継承と革新：森有正記念オルガンの改修

私の所長在任期間中のもう一つの大きなプロジェクトは、本館4階にある「森有正記念オルガン」の改修でした。ICUとゆかりの深い哲学者であり、かつてパリに過ごし、オルガンを愛奏していた森有正先生の願いから1985年に設置されたこの楽器は、日本の名工・草苅徹夫氏の出世作でもあります。

設置から39年経ち、摩耗や不具合が目立っていたため、本館の改修に合わせて大掛かりなオーバーホール

国際基督教大学教授 前・宗教音楽センター長

佐藤 望

Nozomi Sato

を行いました。今回の改修の目玉は、ペダルに16フィートの低音パイプ（Subbass 16'）を新設したことです。

これにより、バッハのオルガン音楽を演奏するために不可欠な響きの厚みを手に入れることができました。ICUでは長年、オルガン・レッスンが行われ、常時20名ほどがレッスンを受けています。ICUのすばらしい大学オルガニスト3名が、レッスンをしてくださっています。学



新設された16フィートパイプ

期ごとに行われる修了コンサートでは、今までにない重厚な響きで、学生たちはさまざまなすばらしい作品に取り組んでいました。このオルガンは、学生たちがリベラル・アーツとしての音楽を学ぶ上で、何よりの生きた教材となっています。



オーバーホールを施し組み立て中の森有正記念オルガン

研究と信仰、そして次世代への教育

私の専門はバッハや17-18世紀のドイツ音楽の研究を行って来ました。東京藝術大学で服部幸三先生や角倉一郎先生から学んだ日々、そしてバッハがどのような楽器を使ったかに関する卒業論文の経験が、今のICUでの活動の土台となっています。

音楽は、リベラル・アーツの根幹です。昨今、AI技術の発展が教育に大きな影響を及ぼしていますが、私は「身体性」を伴う音楽の重要性を再認識しています。指一本で押し潰されてしまうほど繊細なオルガンのパイプは、弱く脆く壊れやすいひとりひとりの人間のようです。しかし、それらが丹念に調整され、組み合わせられることで、デジタルでは再現できない美しいハーモニーを奏でるのです。このオルガンのように「ひとりひとりの声が尊重される、調和した社会を作る」ことの大切さは、ICUの建学の理念でもあります。音楽を通じてこれを学生たちに伝えたいと考えています。

おわりに

立教大学の皆さまとも、同じキリスト教主義大学として、音楽を通じてこれからも深く交流させていただければ幸いです。もし、三鷹のキャンパスにお越しの際は、新しく生まれ変わった小音楽ホール（本館426）にある森有正記念オルガンや、礼拝堂のリーガーオルガンの響きをぜひ聴きにいらっしやってください。

これからも「音楽」という、人間が長い歴史の中で培ってきた精神の結晶を、次の世代に伝え続けること、音楽の学びのなかで学生たちが、より良く生きる術とより良い世界を建設するための術を学ぶことができるよう、さまざまな活動を地道に続けて行きたいと思います。その活動において、立教大学教会音楽研究所とご協力できれば幸いです。



上智大学神学部神学科 教授

森 裕子
Hiroko Mori

2025年夏、私は自分が所属している女子修道会の国際会議のためにフランスに1ヶ月ほど滞在する機会を得た。そして会議終了後、1週間ほど、フランス中東部、ブルゴーニュとスイスの間にあるコンテ地方の、アッセイという名の男子シトー会（日本ではトラピストの名前で知られる）修道院で祈りのひとときを過ごした。ここはいわゆる「観想修道会」と類別される修道院である。アッセイには20名弱の修道士が、基本的には修道院敷地内に留まって共に暮らし、毎日ミサを共に祝うだけでなく、朝4時から始めて、一日の内で決められた時間に合計8回聖堂に集まって、一緒にフランス語で詩編を歌う。日曜や祝日には、ところどころにポリフォニーも入る。この時課の祈りの間の時間には、修道士たちは知的・肉体的労働をしているという。西洋の修道生活の礎を築いた6世紀のヌルシアのベネディクトは、こうした生活を「祈り、そして働く」と表現している。

またベネディクト以来、観想修道会ではホスピタリティの精神が大切にされ、修道士たちは、外部の人たちの受け入れにも心砕いている。アッセイ修道院にも宿泊棟があり、そこで温かい食事が提供され、聖堂でのミサと時課の祈りが外部の人たちに開かれている。こうした修道院は、街の喧騒から離れて、したがって交通アクセスが不便なところに建てられていることが多いが、その分、自然には恵まれている。アッセイ修道院でも、周囲一面に広がる畑や牧草地や森林の間を散歩して、深い緑の中で深呼吸し、心身を解放させることができる。

私自身カトリックの女子修道会のシスターとして生涯を過ごしている身ではあるが、私の所属する修道会は「活動修道会」であり、とりわけ16世紀、宗教改革後のカトリック教会で生きたイグナチオ・デ・ロヨラの霊性に基づいて、祈りに集中する時間も、人と出会って活動する時間も、一日の全てが「活動のただ中での観想（祈り）」となるよう努める修道生活を送っている。もちろん一年に一度は、8日間ほど祈りに専念できる場所に退く（retreat）ことはあるし、毎日一人で静かに祈ったり、一日を振り返ったりする時間をとり、朝夕には共同体で詩編を祈る。さらに活動といっても、私の場合、カトリック大学神学部での勤務と、小教区の教会での信仰入門講座担当を主な仕事としているため、大勢の人々が交差する都心で、結局どっぴりとカトリックの中に身を置いて

いると言わざるを得ない。

それでもアッセイ修道院で、石造りの聖堂いっばいに広がる修道士たちの詩編唱の響きに身を沈め、その余韻の中で、周囲の森や畑の間を歩くことは、他では味わうことのできない特別な時間である。修道士たちの詩編は、それは美しく、心に染み入るものである。しかし彼らは一つひとつの聖歌を、一音一音に細心の注意を払って「演奏」しているというより、むしろ力を抜いて、詩編の祈りが散りばめられた一日全体で、神を賛美し、自らを奉献するくらいのおおらかなダイナミズムを生きているように見受けられる。こうして私は、祈ること、信仰すること、キリスト教会の中で生きることの意味について考えさせられることになり、そういった思索こそが、私にとってこの修道院に滞在する醍醐味となっている。だからこそ私は機会あるたびここを訪れる。

音楽学の分野では私はとりわけ、詩編を歌う教会の伝統に関心を持っている。イスラエルの土壌で生まれ育ったイエスも、その弟子たちも詩編をたびたび祈った。かくして詩編は、初めからキリスト教において祈りの生活の中心に置かれ、それはミサの式次第にも取り込まれることとなった。ローマ帝国の迫害が終わるとキリスト者たちは、朝な夕な、司教座聖堂に集っては詩編を一緒に歌った。修道生活を始めた古代の人たちにとって、祈りとは一日を通して「絶えず」詩編を祈ることであり、1週間で詩編150編全てを唱えるような詩編唱配分も作り上げた。詩編はキリスト信仰者であることのアイデンティティの表現であったと言える。しかも、詩編は、聖書の記述から分かるように、元来、楽器伴奏で、共同体的に歌うものである。

詩編唱の伝統についての私の研究は、もっぱら中世西欧の歴史的な写本研究から始まった。しかし実際に観想修道会の修道士たちの生活の一端に触れることで私はますます、詩編が、つまり詩編を共に歌うことが、共同体を築くことと、個としての信仰を深めることに大きな意味を持っていることに注目したいと思うようになっている。歌うことで個々人の心が信仰において養われ、共に歌うことで、神の前で一緒に生きる仲間の絆を強められる。詩編唱と共同体形成、および個人的霊性の深化の関係について、もう少し考えを巡らしていきたいと私は考えている。

立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊隊長補佐

遠藤 陽平
Yohiei Endo



教会音楽研究所の所員に加えていただき、大変光栄に思います。私は2023年度より、立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊の隊長補佐として、Scott Shaw 先生のもと、池袋チャペルでの音楽活動の運営に携わり、聖歌隊の伴奏と指導を担当し、礼拝でのオルガン演奏も務めています。

私は立教大学経済学部経営学科の卒業生（2005年卒）であり、在学中にオーガニスト・ギルドでオルガンを学び始めました。聖歌隊にも所属し、学生伴奏者を務める機会もいただきました。卒業後渡米し、米国の大学・大学院にてオルガン演奏と合唱指揮を学びながら、教会音楽家として研鑽を積んできました。

米国での滞在は約16年間に亘ります。最初の3年間はワシントン州タコマの Pacific Lutheran University に在籍し、オランダ人オルガニスト Paul Tegels 先生に師事しました。在学中には、北タコマの St. Luke's Episcopal Church にてオルガニストを務めました。また、タコマには歴史的理念に根ざしつつ現代に息づく楽器づくりで評価される Paul Fritts 氏のオルガン工房があり、オルガン製作に携わる機会にも恵まれました。さらに、シアトルの St. Mark's Episcopal Cathedral の Melvin Butler 氏、タコマの Christ Episcopal Church の David Dahl 氏の演奏を学ぶため、時間の許す限り両教会に足を運びました。Flentrop 社および Brombaugh 社によるオルガンが響き渡る両教会での体験は、私の理想とする響きの原点となっています。

その後、イリノイ州の University of Illinois Urbana-Champaign の大学院に進学し、Dana Robinson 先生にオルガン演奏法を、Fred Stoltzfus 先生に合唱指揮法を学びました。Stoltzfus 先生の研究休暇中には、現代合唱分野で国際的評価を得る Donald Nally 氏の指導も受けました。キャンパス内の McKinley Presbyterian Church and Foundation

ではオルガニスト、音楽監督を通算、約13年間務め、同教会所有の Dobson 社製オルガンで日々の練習に励めたことは大きな恵みでした。

米国での生活は、多文化的な音楽との出会いに満ちていました。黒人教会の聖歌隊への参加、コンゴ民主共和国出身の Jean-René Balekita 氏に学んだアフリカ音楽とドラム、アメリカン・ルーツ音楽の探究者 Tom Faux 氏に学んだギターとクロウハンマー・バンジョー、さらには世界各地の歌唱を学ぶ Village Harmony の研修への参加など、多彩な経験を得ました。これらは私の音楽観を広げ、現在の立教での活動にも大きく生かされています。

例えば、今年度のレクイエム奉唱会では、「主われを愛す」の作曲者 William Batchelder Bradbury の「Angel Band」を、私が米国で学んだように、学生には楽譜を配らず口頭で全ての音を伝え、耳から覚えて歌ってもらいました。音符を視覚的に追うことから解放される事により生まれる豊かなハーモニーを学生は体験できたと思います。また、今年度の Nine Lessons and Carols では、「Wexford Carol」として知られているアイルランドの旋律を、ヴァイオリン・フルート・ギターの編成のために編曲し、降臨節の日本語歌詞に付して歌いました。これは、今年度、聖歌隊にその楽器を演奏できるメンバーがいたことにより実現した取り組みです。このように、与えられた機会から生まれてくる音楽を、学生と一緒に演奏できることは何よりの喜びです。

米国では、教会音楽を通して多くの人々と出会い、多様な価値観と豊かな音楽に触れることで、私自身が育てられました。そこで与えられた経験を、今こうして立教の場で還元できることに大きな喜びを感じています。これからも、学生たちとともに音楽を創り続けていきたいと思っています。



オルガン講座 奏楽を楽しむ —TPOに合わせたアレンジ—

【講 師】 崎山裕子 (立教学院オルガニスト)
【開催日時】 2025年4月26日(土)~2026年1月10日(土) 全8回
【場 所】 マグノリア・ルーム
(池袋キャンパス・チャペル会館2階)



リードオルガン講座 —リードオルガンで奏楽を楽しむ—

【講 師】 崎山裕子 (立教学院オルガニスト)
【開催日時】 2025年5月17日(土)~12月6日(土) 全8回
【場 所】 マグノリア・ルーム
(池袋キャンパス・チャペル会館2階)



オルガン講座 オルガン演奏法 春学期 —個人レッスン形式で—

【講 師】 佐藤雅枝 (立教新座中学校・高等学校
オルガニスト)
【開催日時】 2025年6月9日(木)~7月24日(木) 全4回
【場 所】 立教学院聖パウロ礼拝堂 (新座キャンパス)



レクチャーコンサート フランツ・ヨーゼフ・ハイドン:ミサ曲 第14番 変口長調《ハルモニエ・ミサ》

【講 師】 スティーブン・モーガン
(Tokyo Embassy Choir 音楽監督)
【演 奏】 Tokyo Embassy Choir、アンサンブル・メゾン
【開催日時】 2025年11月29日(土) 18:00~20:00
【場 所】 立教学院諸聖徒礼拝堂 (池袋キャンパス)



特別講座 韓国と日本の新しい聖歌 —『日本聖公会聖歌集』から—

【講 師】 キム・ジソン (ソウル神学大学教授)
竹佐古真希 (日本基督教団讃美歌委員)
坂本日菜 (作曲家、横浜聖アンデレ教会
オルガニスト)
崎山裕子 (立教学院オルガニスト)
【開催日時】 2026年1月10日(土) 16:00~17:30
【場 所】 立教学院諸聖徒礼拝堂 (池袋キャンパス)



オルガン講座 秋学期 受難と復活の聖歌・奏楽曲 —個人レッスン形式で—

【講 師】 佐藤雅枝
(立教新座中学校・高等学校オルガニスト)
【開催日時】 2026年2月12日(木)~3月19日(木) 全4回
【場 所】 立教学院聖パウロ礼拝堂 (新座キャンパス)



礼拝形式によるレクチャーコンサート 1630年代のハレにおけるルター派の晩課 —ザムエル・シャイト『宗教的コンチェルト』を中心に—

【講 師】 米沢陽子 (立教大学大学院キリスト教学
研究科特任教授)
大角欣矢 (東京藝術大学音楽学部
楽理科教授)

【演 奏】 サリクス・カンマーコア
【開催日時】 2026年2月21日(土) 14:00~16:30
【場 所】 立教学院諸聖徒礼拝堂 (池袋キャンパス)



レクチャーコンサート 神への賛美、諸教派の声

【講 師】 大島 博 (立教大学大学院キリスト教学
研究科兼任講師)
【演 奏】 今井奈緒子 (オルガン/東北学院大学
教養教育センター教授)
川原千真 (ヴァイオリン/古典四重奏団
第1ヴァイオリン奏者)
ジングアカデミー東京 (合唱)
【開催日時】 2026年3月1日(日) 18:00~19:30
【場 所】 立教学院諸聖徒礼拝堂 (池袋キャンパス)



公開講演会 Laudate Dominum 賛美と霊性の源流をたずねて シリーズ第2回

【講 師】 袴田渉 (南山大学人文学部キリスト教学科
准教授)
寺島奈那 (日本学術振興会特別研究員
DC2・早稲田大学)
阿部善彦 (立教大学文学部キリスト教学科
教授)
【開催日時】 2026年3月13日(金) 14:00~16:30
*リモート開催



教会音楽ワークショップ at立教

◆聖歌隊のための講座

【講師】スコット・ショウ（立教大学文学部キリスト教学科
特任教授）
大島 博（立教大学大学院キリスト教学研究科
兼任講師）



◆オルガン講座

【講師】三浦はつみ（フェリス女学院大学非常勤講師）
遠藤陽平（立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊長補佐）

◆リードオルガン講座

【講師】スコット・ショウ
【開催日時】2026年2月28日（土）～3月1日（日）
【場所】立教学院諸聖徒礼拝堂（池袋キャンパス）
マグノリア・ルーム（池袋キャンパス・
チャペル会館2階）



ニューズレター No.33 2026年3月30日発行
発行者：立教大学教会音楽研究所
編集長：阿部善彦
E-mail : music@rikkyo.ac.jp